

うごめく闇

ふだんめつたに俳句を読まない。句集を開くことはほとんどないが、それでも何冊か取り出し、好きな句に○をつけて、ひとりで遊んでいることもある。

このところ、知り合いが亡くなったたり、友人が重い病気にかかったり、ちょっと気鬱になっていた。人が出払った午後、窓からの光が机の上の皿やグラスなどを輝かすのをぼんやり眺めている時など、虚無というものの実体が、胸の奥まで光が射すようなぐあいになってきて、胸がキュンとなった。

そのくせ、テレビを見ては笑っている。家族や猫やその他多くのものに執着している。一日のおもりというものがない。

詩や文章を考えている時は、少しだけ虚無の薄靄にさらっている気がする。興味のある本や、漫画や、そして俳句を読んでいる時もそうだ。

俳句の中に身を沈めていると、自分のなかの原始的な部分が洗い出されるように思う。原始

的な部分とは、虚無から遠く、ぎゅちりと実が詰まった、うごめく闇という感じである。

家の灯に強弱ありて微ふゆる

夜は何も映さず野川澄みゆけり

右は岡本眸の句。さいきん読むようになって、あちこちに○をつけている。

岡本さんに徴の句がいくつもあり、なかでも引用句は印象的だ。徴などというものをつかって、どんな家の事情も言いあててしまっている。わりに軽やかで透明な感じの句も多いけれど、軽やかな目で暗いところも見透す。

二句目は彼女の句の中でもっとも好きなものである。それにしても、俳句という伝統ある短詩形に、あたらしい発見や認識、オリジナルを盛り込むのは大変なことではないのかと思う。自然詠など、すでに書きつくされているのではないかとも思うが、実際は、原始の闇が果てないように、無尽蔵にうみだされるのだらう。

句集にはたぐさんの句が並んでいて、たとえ目利きでも、素通りしてしまうことがあると思う。だからこそ、新しい読者の楽しみが残されている。一幅の情景にこめられた書き手の発信を、私だけが捉えたと思う瞬間に恵まれることがある。心は中心を欲しがっている。よりどころ、見えない根のようなものがどこかにないかと絶えず探している。夜は何も映さず野川澄みゆけり。その野川の瀬音を聞き、深夜川面に目を凝らす。今日はこの絵を抱いて眠れると思うのだ。